人、

〔平家物語四〕鵠の事

仁平の比ほひ、近衛の院御在位の御時、主上よな〳〵切させ給ふ事有けり、うげんの高僧貴僧に仰て、大法ひ法をゑゆせられけれ共、其ゑるしなし、御なうはうしのこく計の事なるに、東三條のもりの方より、こくうん一むら立來て、御殿の上におほへばかならず切させ給ひけり、是によつて公卿せんぎ有けり、去ぬる寛治の比ほひ、堀川院御在位の御時、主上ゑかのごとく、おびえ魂極せ給ひけり、其時の將軍よし家朝臣、南殿の大床に候はれけるが、御なうのこくげんに及んで、鳴弦する事三度の後、高聲に前陸奥の國守源義家と名のりたりければ、ぎく人身のけよだつて、御なうかならずおこたらせ給ひけり、然ればすなはち先例に任て、ぶしに仰てけいご有べしとて、源平兩家の兵の中をえらませられけるに、此より政をぞえらび出されたりける、○中略頼政たのみ切たるらうどう、遠江國の住人、猪早太に、ほろの風切はいだりける矢をはせて、只一人ぞぐしたりける、我身はふたへのかり衣に、山鳥の尾をもつて作たりけるとがり矢二すじ、しげどうの弓に取そへて、南殿の大床にゑこうす、○中略あんのごとく日比人の申すにたがはず、御なうのこくげんに及で、東三條のもりの方より、くろ雲一村立來て、御殿の上にたな引たり、頼政きつと見上たれば、雲の中にあやしき物のすがた有、いそんずる程ならば、世に有べし共覺えず、去ながら矢取てつがひ、なむ八まん大ぼさつと、心の中にきねんして、よつ引て兵とはなつ、手ごたへしてはたとあたる、えたりやおふと、矢叫をこそゑてんげれ、いのはや太つとより、おつる所を取ておさへ、つかもこぶしも、とをれ〳〵とつゞけさまに、九刀ぞさいたりける、其時上下手々に火をともして、是を御らんじ見給ふに、かしらは猿、むくろはたぬき、尾は蛇、手足はとらのごとくにて、なく聲ぬえにぞにたりける、をそろしなどもおろか也、主上御かんのあまりに、しゝわう御劔と申